

「近世城郭と城下の空間設計を考えるー松江城と姫路城の事例からー」



堀田先生の講義では、姫路城など他の諸城郭との比較から、松江城の個性について、これまでになかった視点からお話をして頂きました。

まず城郭の別名については、各々の城に特色がありますが、姫路城（別名白鷺城）は、城のある姫山に白鷺が多くいたとか、白い城壁から転じて白鷺城と呼ばれたそうです。浜田城は地名の亀山から亀山城と呼ばれ、関連して松江城の別名千鳥城についても触れられました。建物の意匠についても、山陰と山陽の風土の違いにより異なるとのことでした。

次に松江城の絵図を用い、城の正面について説明されました。江戸時代の松江城修復図は東から西へ描かれているものが多く、東側を正面としていたと考えられるとのことでした。東側は城門や石垣・櫓などで整備されていますが、それに比べ西側は土塁等となっています。一方、姫路城は間近まで小山が迫っており、防御の薄い面がありますが、藩主菩提寺に面した方角は備えを薄くするという考えがあったとのことでした。

また、松江城の三之丸は愛媛の松山城などと比較すると正方形の曲輪が独立してあることが特徴的で、松江城と松山城にはそれぞれ独自の曲輪についての考えがあることを説明されました。

次に、城下から城を見るという目線について、赤穂城と丸亀城を取りあげられました。赤穂城は軍学の考えに基づき、本丸が城下から見えないように築城され、その上で本丸に天守台を設け城主の権威を象徴させているとのことでした。これに対し丸亀城は、大手門から城を眺めると天守や建物の屋根が均整とれた形で見えることを、復元イラストを用いて説明されました。松江城についても、本丸にある鉄砲櫓の唐破風の屋根が、藩主の菩提寺である月照寺に面しており、同様の効果をもたらしていたとのことでした。城の東側については二之丸の月見櫓からの視点も指摘されました。

最後に、築城の際に基準となるラインの考えを述べられました。姫路城では古代からの播磨国府域であった条理のライン、中世の総社を組み込んだライン、築城の際に基準となったラインなどみられるそうです。築城の際の基準となるラインには、藩主の菩提寺や信仰の厚い寺社のある山々が目標とされるとのことでした。これらの信仰対象となる山々の方面が敵軍に占拠されることは、城方の敗北を示し、当時としてはこれらの方面から攻められることは考えられていなかったのではと述べられました。松江城についてもこのラインの考えを当てはめた概念図を示され、月照寺から松江城を望むライン、松江城の鬼門にあたる千手院のライン、万寿寺と円成寺のライン、松江城から中世の府中域を望む茶臼山のラインなどを指摘されました。